

真実

君島 聖

新しい校舎にも慣れ、新しい制服も身になじんできた。長い夏休みが終わり、二学期のはじめから転校してきたもう三か月になるのだ。それにも領ける。引越したついでと、以前使っていたほぼ全ての物を捨てて新調したというのに毎日使っていたせいで、そのどれもが新品のようにつるつとした輝きを失っていた。

それにしても、時の流れというのはなんと早いものだろう。そんなじくさいことを思うのに僕の年齢は若すぎるかもしれないけれど、毎日が充実して楽しくて、次の日が来ることをこんなにも喜ばしく感じたことは今までなかった。

今の授業は年末に行うクラスのクリスマス会についての話し合いをしているところだ。みんなゲームをしたり、プレゼント交換をしたり、特技を披露したり、という簡単なものなだけけれど、それぞれやりたいゲーム(ドッジボールやフルーツバスケットなんか人気なようだ)などについて、班ごとに意見を出すことになっている。僕らもその例に漏れず班員全員が仲良く談笑していた。

「河内、お前何やりたい？」

「うーん。僕、運動苦手だからなあ」

「大丈夫よ。女子もいるんだから。あんまり激しい運動だと差が出ちゃうじゃない」

同じ班である日野君の問いかけに、隣の席の水野さんが笑いながらフオローを入れた。優しい友達。なんて温かいのだろう。

彼らなら、きっと僕の話を通じてくれるはずだ。僕はゆっくりと深く息を吸い込み、ためていたものを吐き出すように言った。

「僕、みんなに黙っていたことがあるんだ」

机を合わせている彼らが一斉に顔を強張らせた。僕があまりに深刻な顔をしていたせいだろう。僕の口から何が飛び出すのか、みんなが注目する。それは何の感情も含まない視線のほすなのに、それが鋭く突き刺さっているように思えて痛い。

「僕……実は、サイコメトラーなんだ！」

僕は痛みをこらえながらも懸命に、沈黙を破った。気を張っていたせいかわ、大声で叫んでしまったが、それに気づいたのはすでに叫び終わったあとだった。

普段はこんな目立つような言動は絶対にならない。それなのに慣れないことをしてしまい、急に迫り上がってきた羞恥で思わず顔を俯けた。

こんな形となってしまった僕の告白に、教室はしんと静まり返り、その沈黙がなおさら僕を責め立てる。

そう、僕は『サイコメトラー』能力を持っている。僕

が右の手で生物や物質に触れば、一瞬で対象に込められた思念や過去の経歴を知ることができる。つまり、超能力者ということだ。

小さい頃から続けているトレーニングによって、その力はコントロールできるようになり、おかげで不用意に人の心や物の記憶を読んしまうことはなくなった。

この能力の使い時といえば、たまに拾う落し物の持ち主を探すくらいで、メリットはほとんどない能力だ。

こんな使い道のない能力でも、普通の人には存在しないものだ。これを人に言ったところで、誰が信じてくれるだろうか。

そう思っただけで隠し続けていたのだから、誰も知るはずがない。でも僕は、みんなにそれを知ってほしかった。僕と友達でいてくれるみんなに。

彼らの反応を知りたい気持ちに負け、恐る恐る顔を上げてみる。隣の水野さんに視点の標準を合わせると、水野さんの呆気にとられた表情が、とびきりの笑顔にパツと変わった。

「本当?! すごいわ河内君!」

水野さんが手を胸の前で合わせて声を上げた。

「河内! なんだお前、そんなこと隠してたのか!! かつこいいじゃん!」

「そうだわ! 素晴らしい能力じゃない!」

日野君、続いてその後ろにいた山口さんがガタンと席

を立てて賛同すると、他のみんなも次々と僕に声をかけ始めた。クラスの端にいた生徒も自分の席から僕の机の周りに集まってきてくれた。

その瞬間、僕の心の中にもやもやと出ていた霧のようなものがすうっと消えていった。

「みんな!」

僕を信じて受け入れてくれたみんな。彼らへの温かい気持ちで胸が満ちていく。

友情ってこういうことなのか!

僕の能力の詳細をみんなに話すと、みんなはそれぞれ歓声をあげたり、僕を褒めたたえたりしてくれた。

「ねえ、河内君、君の能力を私たちに見せてくれる?」
学級委員の上田さんがニコニコと提案すると、それに続けと見たい、見たい、という声がそこらじゅうで聞こえる。

僕はみんなの期待にこたえなければならぬ。信じてくれるみんなのために。

「うん! いいよ!」

クラスのリーダーとも言える沢谷君が、じゃあと提案した。

「その力だけで何かを読み取ってもらうために、目隠しとヘッドフォンつけさせようぜ!」

僕はもちろん承諾した。自信は有り余るほどあるのだ。

佐田さんのアイポッドと木下君のアイマスクを借り、

装着する。

ざわつく教室の雑音は遠くなり、アイマスクによって遮られた蛍光灯の光は透けて、淡くその布地の色を見させた。もう僕は眼前に何があるかも、それがどんな音を出すのかもわからない。

さあ、何を出されるのだろうか。わくわくしながら能力を見せる瞬間を心待ちにしていると、耳元で声が出た。

「移動しようぜ」

たぶん、松本君の声だろう。松本君の声はクラスの男子の中で、一番低く特徴がある声なのだ。それくらいなら超能力を使わずともすぐにわかる。

僕は領いて、すつと席から立ち上がり、誰かに腕を引かれるまま歩きだした。

しばらく右へ左へと連れ回され、いくらか数カ月歩いた校舎とはいえ、現在どこを歩いているのかはすでにわからなくなっていた。安全を考えてか、段差は歩かされていないことから推測するに、ここは僕らの教室がある二階のままで。

ここで腕を引いている子からサイコメトリングするのはルール違反。それはわかっているから、絶対にそんなことはしない。

しかし、なぜだろう。用心しているのだろうか。腕を引く子はわざわざ僕の左の腕をつかんでいる。いや、これは正しい判断を下すためにあえてやっていることなの

だろう。

しばらくして手を引く力がなくなり、そこで立ち止まる。そして右腕をつかまれ、指があるところに導かれた。

誰かまではわからないが、大音量で流れるメロディにかき消されることなく、耳元で大きめの声が聞こえた。

「これにある記憶を辿って、これが何なのか、あててくれ！」

「これかい？ わかった」

僕はそれにゆっくりと触れたその瞬間、バチツと静電気のようなものが指に走——らなかつた。

おかしい。記憶が流れ込んで来ない。

前にあるものの存在を確かめるように普通に触れると、表面はつるんとしていて、指をそのまま横へスライドさせると、キュキュツと音がした。どうやら、表面はなめらかなものようだ。他の情報は遮断されているために、それがなんなのかは全く分からない。

「あれ？ 何も感じないんだけど……」

僕が呟くと、先ほどと同じ声が聞こえた。

「もつと強く押せば、きつと見えるよ！」

強く押したところで能力に差はない。それはわかっているのだけれど、このまま何も正解を見いだせなければ僕はまた嘘つき呼ばわりされてしまう。僕はその声に従い、もう少し強めに押した。

「もつとだ」

僕は指に力を入れた。

「もつと！ もつと強く！」

僕は思いつきりぐつと指を押し込んだ――

ジリリリリリリリリリリ

リリリリリリリリリリリリ

けたたましい音があたりに鳴り響く。僕には何が何だか、全くもってわからない。

目隠しとイヤホンを急いで外すと、後ろについてきていたらしいクラスメイトたちが、長い廊下を一斉に駆け去るところだった。

「ありえねえ！ マジで押しやがった!!」

「バーカ！ そんなもん信じるわけねえだろ！」

「中二病オー！」

ハハハハ!! という笑い声が火災警報器の音に混じって、かすかに遠くから聞こえる。

それとは逆に、彼らが消えていく曲がり角から先生が出現してこちらに向かって突進してくるのが見えている。これは逃げなければならぬ。それなのに、足は地に根が張っているかのように動いてはくれない。

パニックになると、不意に左手の腕時計に触れてしまい、その瞬間、右手に電撃が走った。しまったと思った時にはもう遅く、夏まで僕がいた学校での記憶がバババツと高速で流れ込んできた。

中二病中二病！ 邪気眼邪気眼！ と呼ばれ続け、気持ち悪い！ バカじゃないの！ といじめられた記憶が――

ああ、先生がもう、すぐそこまで迫ってきている。

父さんからもらった時計をあのととき捨てなかったことを初めて後悔した。

物も記憶も期待も何も捨てきれず、どこへも逃げられない僕。

結局僕はいじめられっこのままだった。

キーワード

「目隠しピンポンダッシュ」、「霧が出ていた」